

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 78 2009年9月12日発行



2009年6月 甲状腺手術後の子ども・
その他の病気の子どものための特別保養



ウクライナ
サナトリウム「ゴルナヤ・チサ」

ベラルーシ
子ども健康回復センター「希望21」

日本のみなさんのおかげで、僕たちはサナトリウム「ゴルナヤ・チサ」で元気になることができました。僕たちのような子どものことを忘れず、いつも助けてくれるみなさんに感謝します。ウクライナ イリヤ（15歳・男）

「希望21」はとても楽しくて退屈することが全くありませんでした。もしまたここに来ることができたらどんなにうれしいことでしょう。ベラルーシ ユリヤ（15歳・女）



皆様の募金のおかげで、今年も子どもたちを保養に招待することができました。

ベラルーシ「甲状腺手術後の子どもと他の腫瘍病の子どものための特別保養」

ベラルーシ 子ども健康回復センター 「希望（ナデジダ）21」

実施期間：2009年6月9日～7月2日

参加団体：「困難の中の子どもたちへの希望」
ゴメリ市、「チェルノブイリのサイン」ミンスク市

参加者：甲状腺ガン、甲状腺腫、脳腫瘍、血液の病気、リンパ系の病気など。子ども33人（8歳～18歳）と3人の引率者。

2年目になる腫瘍病の子どもたちの受け入れ

12年前から開催している「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に、昨年からは甲状腺以外の腫瘍病の子どもたちを受け入れ始めました。これは「ナデジダ」にとっても初めての経験でした。このような病気の子どもたちを受け入れているサナトリウムは、ベラルーシではナデジダを含め2箇所しかありません。もうひとつはベラルーシ保健省のサナトリウムですが、そこでは治療のみが行われており、子どもたちの催しやクラブ活動などは行われていません。腫瘍病の子どもたちにとって「ナデジダ」は、病気を忘れて、仲間と共に楽しい時間を過ごすことのできる唯一の施設なのです。

センターでの過ごし方

子どもたちが到着した翌日、センターの小児科医による全員の健康診断が行われ、保養中の治療計画が決められます。それぞれの症状に合

せて、マッサージ・歯科治療・塩セラピー・アロマセラピー・サウナ療法・温浴療法・電気治療・薬草療法・蒸気吸入療法・運動療法などを受けられます。

保養中には、自分の好きなクラブ活動に参加することができます。シンセサイザー・デジカメ・コンピュータグラフィック・手芸・陶芸・絵画教室などがあります。また、毎日センターの職員によるいろいろな催し物が行われます。屋内では歌や踊りのコンクール・演劇・ゲームなど、誰もが参加できる楽しい催し物です。スポーツの催し物も多く行われます。屋内では卓球・バスケットボール、屋外ではサッカー・バレーボールなど、各グループから得意な子どもが参加し、宿泊棟対抗戦なども行われます。時々、近くの町から子どもサッカーチームを招き、センターの子どもと交流試合も行われます。

子どもたちの保養には、彼らの面倒をみるための大人が必ず付き添います。今回は、ゴメリ市の小児病院の看護婦2名と、教育大学の学生1名が引率者として参加しました。また、各グループにはセンターの教育担当者が決められ、これらの人々が協力して保養中の子どもたちの世話をします。グループごとにミーティングをしたり、小さいゲームをしたりして楽しませてくれます。引率者たちもセンターの担当者も、まるでどの子も自分の子どものようにあたたかく、時には厳しく接していました。子どもたちも彼女たちのことが大好きになりました。



きかん坊のコーリヤ

今回初めて特別保養に参加した10歳のコーリヤ。初めのうちは、大声を出したり、走り回ったり、他の子どもを叩いたりとやりたい放題で、引率者やセンターの担当者（全員が女性）たちを手こずらせていました。心理療法士もコーリヤには注意を払い、みんなが愛情をもって辛抱強く接していくうちに、だんだんと落ち着いてきました。コーリヤは村で母親と妹の3人で貧しい暮らしをしています。母親は農作業などで忙しく、子どもにちゃんとした食事与えられないような生活です。センターでは食べ物は十分に提供されます。好き嫌いがあつたりして食事を残す子どももいます。しかしコーリヤは一度も食事を残したことがありません。コーリヤには、十分な愛情と栄養が必要だったので。最初はコーリヤを避けていた他の子どもたちも、だんだんと彼を受け入れるようになっていきました。

脳腫瘍の手術後のローマ

12歳のローマは、脳腫瘍の手術後、手足と言語に後遺症が残りました。初めの頃はいつも引率者たちの助けが必要でした。引っ込み思案だったローマは、日を追うごとにだんだん他の子どもの中にも一人で入っていけるようになり、夜のディスコ（子どもたちはみんなこれを楽しみにしています）では、楽しそうに体を動かしていました。また、保養に招待してくれた日本人へのお礼にと、不自由な手で一生懸命絵を描いてくれました。

ビーズ細工の得意なマーシャ

17歳のマーシャは、ビーズでアクセサリーや飾り物を作るのが得意です。彼女はいつも手芸教室で作品づくりに励んでいました。手芸教室の先生は、マーシャがいつでも作業できるように、彼女専用の



場所を用意したくらいです。マーシャの母親はアルコール依存症で、家事をほとんどしていません。「うちには食べ物がないこともよくあります」と話しました。

日本の教室

今回は、折り紙・日本の手遊び・盆踊り・日本語・マッサージの5つの教室を開催しました。折り紙（「三重チェルノブイリ被曝児童募金」からのご寄付）は、子どもたちも引率のおとなたちも真剣に取り組んでいました。おとなたちは、「折り紙は、作品が出来上がったときの喜びと、その過程で心を落ち着かせることができるので、子どもたちの精神面により影響をもたらす」、と言いました。

“希望21”所長 V・マクシンスキー

「今年も子どもたちの保養が無事終了し、大変うれしく思います。子ども基金と続けてきた、病気の子どもの特別保養の意義は大きいです。ご支援にはいつも職員一同とても感謝しています。今後も協力関係を続けていきたいです。

今回の世界的経済危機はベラルーシには影響がないと言われていますが、将来の見通しは否定的な側面が多いです。政府は国家予算をどんどん削っています。建設工事もいたるところで中断しています。今のところチェルノブイリ被曝児の保養についての予算は削られていませんが、我々自身も節約に努め2009年を乗り切っていきたいと思います」

保養に参加した子どもたちの感想は、次号に掲載します。



ウクライナ「甲状腺手術後の子どもと汚染地域の病気の子どものための特別保養」

サナトリウム「ゴルナヤ・チサ」

実施期間：2009年6月22日～7月2日

参加者：甲状腺ガン、甲状腺腫、脊椎側湾症など。子ども25人（8歳～16歳）と4人の引率者。

子どもたちの保養に初めて利用する施設

今年初めて、ザカルパチエ州にあるサナトリウムで子どもたちの保養を実施しました。ウクライナの南西、ルーマニア国境に近い場所にあるこのサナトリウムは、ソビエト時代、宇宙飛行士や、原発労働者の健康回復のために開設されました。ソビエト崩壊後、民間のサナトリウムとなりました。2年前に改装を終えたばかりの、新しい清潔な施設です。周りをカルパチヤの山々に囲まれ、すぐ近くを川が流れる、大変自然環境のよい場所にあります。サナトリウムでは鉱泉治療が行われています。血液の浄化、関節の病気、神経の鎮静に効果があると言われています。ウクライナだけでなく、ロシアやヨーロッパ各地からも人々が治療に訪れるそうです。

参加した子どもたち

子ども基金と協力関係にある慈善団体「チェルノブイリ子どもたちの生存」が窓口となり、放射能汚染地域にある病院の医師が推薦した病気の子どもたちと、キエフ市内にある内分泌研究所が紹介した甲状腺手術後の子どもたちを招待しました。

汚染地域のジトーミ



ル州オブルチ地区・ナロジチ地区などからは、脊椎側湾症など骨に異常のある子どもたちが参加しました。キエフ州・チェルニゴフ州・ドネツク州からは、甲状腺手術後の子どもたちが参加しました。

サナトリウムでの様子

到着後、医師による個別の健康診断が行われ、滞在中の治療項目が決められました。このサナトリウムの特徴は鉱泉治療を受けられることです（腫瘍病の子どもはこの治療を受けることができません）。それぞれが決められた時間、一人ずつバスタブにつかります。温度は体温くらいのぬるま湯で、炭酸水のため少し泡が出ています。お湯の色は茶色がかったオレンジ色です。その他、アロマセラピー、薬草茶、電気・磁気・レーザー治療、シャワー療法、マッサージ、蒸気吸入療法、運動療法がありました。

このサナトリウムでは、病気の子どもたちのグループを受け入れるのは今回が初めてでした。しかしサナトリウム側がいろいろ配慮してくれたおかげで、子どもたちは問題なく過ごすことができました。食事の質も量も、子どもたちにとって十分なものでした。3食の他に、毎日必ずおやつ（ヨーグルト、ケフィール、バナナ、りんご、オレンジなど）が付き



ます。滞在しているのは、杖をついた老人（若い人もいる）など、本当に治療を目的とした人ばかりです。子ども専用のサナトリウムではありませんので、子ど

も用の遊戯施設などはありません。そこで、一般客が利用しない時間、運動療法のための部屋を開放してもらい遊べるようにしました。そこで卓球大会を開いたり、建物から少し離れた広場でバレーボールをしたりしました。館内では他の保養者の迷惑にならぬよう、静かにしていなければなりませんでした。しかし、子どもたちが時々騒いだり走り回ったりして、クレームが付くこともありました。

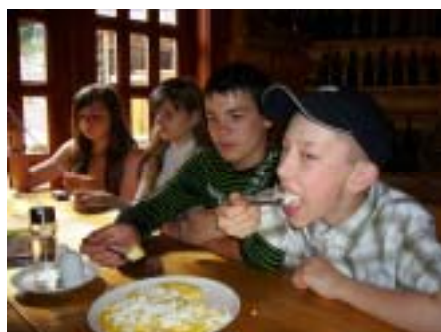
豊かな自然環境

サナトリウム内ではこのようにいくつか制限がありますが、周りの自然環境は素晴らしく、毎日近くの丘や川に散歩に行くことができました。サナトリウムの建物のすぐ裏手には丘があります。そこをゆっくりとした足取りで1時間半も上れば、麓の村の様子が見渡せ、周りの山並みのパノラマが広がります。歩きながら野生のブルーベリーや野いちごを摘んで食べることもできます。鉱泉の治療効果だけでなく、新鮮な山の空気だけでも、子どもたちの健康回復に大きな効果をもたらしました。

参加した子どもたちの感想

私たちのような障害児を支援してくれるチェルノブイリ基金が日本にあることを知ることができて、とても嬉しく思いました。これまでもサナトリウムに行ったことはありますが、「ゴルナヤ・チサ」のような素晴らしいところは他にどこにもありませんでした。ここはまるで「地上の天国」のようでした。このサナトリウムが私たちのような子どもたちを恐れずに責任をもって受け入れてくれたことに、とても感謝しています。(オーリャ 女・16歳)

サナトリウム「ゴルナヤ・チサ」で素晴らしい保養ができて、健康を回復する機会を得ることができて、チェルノブイリ子ども基金にとっても感謝しています。サナトリウムではおいしくて栄養のある食事が出されました。スタッフたちは私たちにとても親切に接してくれました。私たちはたくさんの興味深い場所や、効能のあ



る源泉に連れて行ってもらいました。私は生まれて初めてサナトリウムに滞在しましたが、ここが大好き

になりました。このような保養がまたできたらいいと思います。また、折り紙と日本語を習ったことで、私は日本の文化を学ぶことに興味を持つようになりました。(ニーナ 女・14歳)

素晴らしい保養に招待してくれてありがとうございます。日本のみなさんのおかげで、僕たちはサナトリウム「ゴルナヤ・チサ」で元気になることができました。僕たちはここでいろいろなことを知りました。薬効のある草、ミネラルウォーターの源泉、この地方の料理などです。日本の募金者の皆さんに心から感謝します。僕たちのような子どものことを忘れず、いつも助けてくれてありがとうございます。(イリヤ 男・15歳)

ご寄贈いただきました品物を届けてまいりました。誠にありがとうございます。

「希望21」へ寄贈
…折り紙・サインペン(三重チェルノブイリ被曝児童救援募金様より)
…大相撲カレンダー(藤田様より)
…雑誌「にっぽにあ」(平凡社様より)

「希望21」「ゴルナヤ・チサ」特別保養参加者全員へ
…日本人形のしおり(中嶋様より)
里子支援を受けている子どもたちへ
…タオルハンカチ(三重チェルノブイリ被曝児童救援募金様より)

日本キリスト教協議会様から「希望21」への寄付金により、シンセサイザー・デジタルカメラ・絵画・手芸の各教室用の教材と、バドミントン・卓球・バレーボール・バスケットボール・チェス・クロスカントリースキーなどのスポーツ用品が購入されました。

23年目のチェルノブイリ

2009年3月訪問 報告 広河 隆一 (中篇)

チェルノブイリ地区イリインツ村

事故の後、ある日、風は西の方へ流れていきました。しかし、汚染地図では、高濃度汚染地域のところどころに裂け目があります。周囲の村はすべてなくなってしまっても、その村だけが残るということがありました。例えば、チェルノブイリの西にあるナロジチ村近くでは、風が南に下がって、また逆流したかのように北上したため、消えた村々に囲まれた形で1村だけが残りました。ただ、牧草は村の周辺で育てますし、村人はその牧草を食べた牛の乳などを今でも食料にしているわけです。イリインツという村は比較的汚染が少なく、お年寄りに住むことが許されています。つまり、放射能の被害が



現れるより寿命が先に来るだろうと計算された人たちは住むことを許されているわけです。学校の校庭にはガスマスクが捨てられています。いったんは避難したけれど、やはりどこにも行きたくないと言って戻ってきた方がいます。ハンナ(*)さんもその1人で84歳です。

オブルチ地区 病気の子もたち

原発の西にオブルチ地区があります。その中のオブルチという町は、地域の中でも大きな立派な町でしたが、周囲の町は全部消えてしまいました。この町そのものは汚染がそれほど深刻ではないということで残りました。しかし、政府からの補助はありませんし、23年間、周辺

で採れる汚染された作物などを食べ続けていますので、当然、体にはいろいろな異常が出てきます。町の外に行こうとするときには、検問所で調べられるわけです。



ニコライという男の子は13歳で、胆嚢の手術を受けました。父親は運転手で母親は息子の介護で手一杯で

す。父親の給料と障害者年金をあわせても、月の収入は100ドル程にしかならず、病気の治療や検査ですぐに消えてしまうとっていました。



16歳のエフゲニーは去年の6月に大腿骨に腫瘍が発見され、8月に手術を受けました。父親はすでに亡く

なっており、障害者年金だけで、母親と生活しています。どちらの家族も息子に汚染されていない安全な物を食べさせたいけれど経済的理由で、それができない、という状況です。

オブルチ地区のセリシエという村の入り口には、村に悪いものが入らないよう、村を守る十



字架を立てられています。お地蔵さんのような役割ですね。その村にダリーナ(2)という女の子がいます。脳腫瘍の手術をし、いま、化学療法を受けています。父親はいません。母親は近くの石油鉱山で働き、給料は月に100ドルですが、先の金融危



機で労働時間が短縮され、給料も半分になってしまったそうです。



オブルチ中央病院副院長オレグはこう言います。オブルチの障害児は260人で、そのうち100人がチェル

ノブイリ事故の影響だと認定されています。オブルチ地区のあるジトミル州、かなり広大な地域ですが、その中でも最高の値だそうです。彼が恐れていることのひとつは、早産がとも増えています、早産で子どもが生まれたときに、対処する方法がないということです。早産の赤ちゃんは呼吸器がついた保育器でしばらく育てられる必要があるのですが、この病院には保育器がありません。大きな病院までは車で2時間かかるので、それではとても間に合わないということです。できれば、早産用の保育器^{(*)3}を援助してくれないかと言っていました。

汚染された村や地域では、村が消え、人が少なくなると同時に、その伝統や文化も消えていっています。そんな中、自立するために、また、伝統文化を継承するためにいろいろな試みが行われています。そのひとつがオブルチの民族芸術・技能アカデミーです。工房で、子どもたちが麦わら細工を習っています。^{(*)4}

内分泌研究所^{(*)5}

事故による一番大きな被害は小児甲状腺ガンです。キエフ市にある内分泌研究所では、今でも甲状腺の状態を調べるために、超音波診断などによる精密検査を行っています。男の子が甲状腺ガンになる確率は低く、小児甲状腺ガンの4人に3人は女の子です。内分泌研究所には、事



故当時0~18歳の甲状腺ガンの患者2700人が登録されていて、ずっと追跡調査をしています。そのうち420人はガンが他に転移してしまっているということです。事故当時、ヒロシマを参考に、どんな病気が、何人位発症するかという予測が立てられました。甲状腺ガンの潜伏期は通常4~12年と言われていますが、チェルノブイリによって、甲状腺ガンは事故から23年たっても発症するということがわかりました。放射能のもたらす病気が恐ろしいのは、それまでの知識がほとんど役に立たないということ、つまり、新しいことが起こってしまうということです。人間が知り得ているのは、ほんの一部にすぎないということです。

細胞診では、針を刺して腫瘍組織を取り出して調べます。取り出したすぐ横で、一つひとつ調べます。通常、小児甲状腺ガンは100万人にひとり位の割合で発症しますが、現在、発症率が低くなったとはいえ、チェルノブイリの汚染地では、その60倍位の高さで発症しています。いまも、幼い子どもまでもが手術を行っています。

ナロジチ地区 ナージャと息子^{(*)6}

事故後、最初にKGBから許可が下りて入ったモテキ村で、ナージャ(希望という意味)という女の子に出会いました。そのときに、ベンチに腰掛けて放心したような表情の女の子がいたので、スナップ写真を撮りました。それがナージャです。実はそれは、ナージャの母親が亡くなる時だったそうです。その後、何度か訪ねました。ナージャと弟、妹、3人だけで住んでいたのですが、現地の救援団体を通して日本がお金を支援するという形で、ナージャたちとモテキ村のいくつかの特にひどい状況の子どもたちへの援助が始まりました。ナージャは、笑い声のほとんどない女の子でしたが、だんだん気持ちほぐれるようになりました。いまは村に息子と住んでいます。

ベラルーシの原発建設計画

ゴメリ州の立ち入り禁止区域全体の責任者で、ベラルーシ非常事態省のトップだった人が、最近、更迭されました。それは、彼のやっていること、言っていることが国の方針と合わないからです。彼自身が恐れずに語ってくれたのは、汚染地を管理する予算が極端に減らされているということです。その中には、汚染地を監視・管理する人員、家を取り壊して埋める人員の経費も含まれます。広大にあった危険地域が小さく狭められ、いままで危険だと言われていた所に安全宣言が出されています。それは、ベラルーシ国内に原発を作ろうという動きがあるからだ、彼は言います。あまり危険だ危険だと言っているのは、原発を作れないからです。安全で豊かな電力の原発を作りましょう、という方針で、国はいま進んでいます。

ベラルーシの高濃度汚染地/バルトロミエフカ村

高濃度汚染地域にある、破壊された村バルジエ村には、一人だけ老人が住んでいました。バルトロミエフカ村。ここは昔、家がずらっと並んで建っていましたが、いまは全部取り壊されて埋められています。村の入り口の看板で、ここに村があったということはわかりますが、どういう家があって、どういう人が住んでいたのかということはわかりません。小学校だけはレンガ造りなので、取り壊すのが大変だったから、いまだに残っています。

ミンスク小児血液腫瘍センター

ここには血液の病気だけでなく、さまざまな腫瘍の病気の患者が送り込まれるベラルーシの中心的な病院です。オルガ・アレイニコワ院長がもっと小さな病院の一角で治療していたころから彼女を通して援助してい



ます。立っているのがスラヴァ、横になっているキリル、ふたりとも足に腫瘍のある男の子です。

クラスノポリエのニーナ^(*)

ニーナは、写真集『ニーナ先生と子どもたち』や子ども基金の過去のカレンダーにも登場したことがあり、クラスノポリエの小学校の先生でした。原発から150~180キロ離れた所で、高濃度汚染地域に取り囲まれるように取り残された町です。1990年、私は原発周辺からずっと、廃墟となった村や町を回りました。すべてが汚染されていて何を食べていいかわからない、昨日まで安全だと言われていた所が、急に危険だと言われ始めたような時期でした。私は、汚染地の物は危険だから一切食べてはいけないと自分に言い聞かせて、外の町でパンや缶詰などを買い込んで取材していました。食材も尽きて空腹で、雨も降ってきて気分も陰鬱になり、これで今回の取材は終わりにしようと思って訪ねたのがクラスノポリエでした。町に向かう途中、急に結婚式の車列が走ってきたので、ついていたら、皆大喜びして迎えてくれました。近くの村の人も怖がって近づかないのに、君たちはよく日本からやってきてくれたと。それで、お祝いだ、ありがとう、食べてくれと、テーブルに並べられたご馳走を私たちに勧めました。食べてはいけないようなミルク製品、卵製品、肉製品、私には悪魔の食卓のように見えたが、お祝いの席ですから、もちろんそんなことを口には出せない。それらは危険だから食べてはいけないなどと説教をしても、他に食べる物がないわけです。



(次号につづく)

[注]

*1 2010年度カレンダーの5月に登場

*2 同カレンダーの3月に登場

*3 保育器:在ウクライナ日本大使館が行っている“草の根無償支援”の助成金を得られないか、現在問い合わせ中

*4 2010年度カレンダーの6月に登場

*5 2010年度カレンダー「子ども基金の活動」欄で紹介

*6 同カレンダーの11月に登場

*7 同カレンダーの7月、12月、裏表紙に登場



家族訪問 09年6月 報告 佐々木 真理

6月のウクライナ・ベラルーシは緑の美しい季節です。広大な菜の花畑を通り過ぎると、緑の森に囲まれた村が現れます。そこでは色とりどりの花が咲き、さくらんぼが実をつけています。畑では野菜が育ち、草原では牛が草を食べています。そんなおだやかな風景なのに、そこは「放射能汚染地域」なのです。子ども基金を通して支援している家族を訪問しました。

ウクライナ

S・ターニャ 1997年生まれ
ヴィンニツァ州シェルゴロド地区ジュリン村

2008年11月からヴィンニツァ市の小児州立病院で白血病の治療を続けている。免疫力が大変弱いため、外に出るときはマスクをしている。痩せていて顔色も青白い。肝臓にも問題が現れ、足の痛みも訴えている。好きだったダンスもできなくなり、長くてふさふさだった髪の毛がほとんど抜けてしまった。入院中は絵を書いたりパズルをしたりして過ごす。病院で描いた絵を見せてくれた。学校の先生や友達はみんな心配してくれて、電話をくれたりカードを送ってくれたりするという。

なだらかな緑の丘に囲まれた村で、人々は畑を耕し牛・鶏・豚を飼いながら暮らしている。色鮮やかなタイルモザイクの模様で外壁を飾っている家も多い。見た目には緑あふれる美しい村だが、チェルノブイリ第4ゾ



ーン()に指定されている。以前は家具工場などもあったが、今は仕事は何もないという。父親には定職がなく、仕事のあるときだけ出かけていく。ターニャの治療費を捻出するため、家畜を売ったり、親戚からお金を借りたりしている。

ウクライナの「チェルノブイリゾーン」設定基準 第1ゾーン:プリピャチ、第2ゾーン:30キロ圏内、第3ゾーン:50キロ圏内、第4ゾーン:各地に転々としている高濃度汚染地域

ベラルーシ

M・ディーマ 2000年生まれ
ゴメリ州カリニコヴィチ地区スイロド村

2008年に脳腫瘍の手術を受けた。手術後、左手



の感覚が全くなり動けなくなった。マッサージにも通い、医師の指導の下、家でも母親がマッサージをしている。そのおかげで少しずつ感覚が戻ってきた。しかし今でも左の薬指の感覚だけは戻らない。歩くことはできるが左足の先あまり感覚がない。頭には手術

の傷跡が残っている。今も3ヶ月に1度はミンスク市の病院へ治療に通い、ビタミン剤と痙攣止めの薬を飲み続けている。地元の病院には半年に1度検査に通っている。

ディーマは、農場労働者用のアパートに両親と兄と4人で暮らしている。家の暖房・給湯用に薪と木炭を使用しているため、部屋の中の空気が悪くなり、子どもたちは頭が痛くなるという。「どんなに薪をたいても居間は暖かくなり、ここの住環境はよくありません」と母親は話す。ディーマの障害児保障として、社会保障アパートを得る権利があるが、順番待ちの状態である。

手術・入院が長く続いたため、ディーマは学校を休学しなければならなかった。現在は自宅学習をしているが、来年からは学校に通う予定。「勉強についていくのは大変だと思いますが、健康さえあれば、他の事はあとでもよいと思います。以前は特に神様の存在を感じていませんでしたが、

息子が病気になってから神様に強く祈るようになりました」と母親は話した。

Z・レーラ 2003 年生まれ
ゴメリ州ブラーギン市

レーラは母親ナデジダ（28 歳）と二人暮らし。3 歳のとき検査で異常が見つかり、ゴメリの病院で薬草やビタミン剤による治療を受けた。その後、婦人科で筋芽細胞の増殖による悪性腫瘍と診断され、ミンスク市の小児ガンセンターで手術と化学療法を受けた。現在も定期的に検査に通っている。住んでいる町から病院のあるミンスク市まではバスで片道 9 時間かかる。

ブラーギン市は、チェルノブイリ原発 30 キロ圏内のすぐ外に位置している。事故後、住民は一度全員が避難した。そのときの様子を、慈善団体の代表者は、「人が誰もいなくなった街は大変不気味で、まるで戦争の後のようでした」と思い出す。しかしその後、人々は町に戻ってきた。「ベラルーシの大統領は、“ここはもう住んでも大丈夫、畑で作物を作っても大丈夫”と言っています。そうでないことは誰だってわかっていますが、他に行くところがないからここにいます」ナデジダは言った。彼女の生まれた村には今でも外国の訪問団が来たり、ドイツやイギリスなどへの保養に子どもたちが招待されたりしている。

ナデジダは町の学校の教師をしている。「ブラーギンの子どもたちはみんな免疫力が低く貧血の子どもが多いです。インフルエンザが流行ると大変なことになります。最近も 1 ヶ月半の子どもが亡くなりました。町に新しい病院もできたのに救えなかったのです」と話した。



A・セルゲイ 1980 年生まれ、妻ナターシャ 1980 年
生まれ、息子 2005 年生まれ、娘 2009 年 1 月生まれ、
ミンスク市

セルゲイは 2001 年に甲状腺ガンの手術を受け、第 3 級障害者に認定されている。甲状腺ホルモン剤を服用している。胆嚢、肝臓、心臓にも問題がある。建設の仕事をしているが、経済危機の影響で工事が中断したままいつ再開するかわからず、2 ヶ月間無給で自宅待機中。娘は髄膜炎が原因の発達遅滞と診断された。目と心臓にも異常が発見され、投薬治療・理学療法を受けている。妻ナターシャは妊娠中から体調を崩し、出産後何度も入院している。長男は免疫力が低く病気がちで幼稚園にはほとんど通っていない。食も細く、顔色も青白い。ナターシャは自分の病気と子どもたちの病気に疲れきっている様子だった。「病院ではひどい対応をされることがあります。娘が入院していたとき、医師が研修医を何人か連れてきて、娘のベッドのそばで“こういう症状の子どもは長く生きられない”というようなことを言いました。病院には重症の子どもがたくさんいて、いるだけで気が滅入ります。娘にはいろいろな薬やマッサージ治療が必要です。この国では病気の子どもの援助はなくなってしまい、高い薬もみんな自分で買わなければなりません。ベラルーシで売っていない薬もあり、ロシアから取り寄せます。マッサージは 10 回コースで 100 ドルかかります」

チェルノブイリ事故当時、セルゲイは妹アレーシャ（1984 年生まれ）、両親と一緒にゴメリ州の祖母の村にいた。9 年後にアレーシャが甲状腺ガンにかかり、その後セルゲイも同じ病気にかかった。現在アレーシャは店員の仕事に就いている。



母親やアレーシャがときどきセルゲイの子どもたちの面倒を見にきてくれる。セルゲイの家の台所の棚には、家族が服用している何種類もの薬が並んでいた。

チェルノブイリ 24 周年 救援カレンダー2010「いのちの輝き」

10月1日完成 ご予約受付中

放射能汚染地域に暮らしながら二人の子どもを育てたニーナ*、病気と闘いながら懸命に生きる子どもたち、それぞれの“いのちの輝き”を見つめたカレンダーです。

* 広河隆一著『ニーナ先生と子どもたち』(小学館)の主人公

2010年度は一部1300円です。送料3部まで200円。4~9部は実費。10部以上1割引で送料無料です。

デザイン：スタジオ・ギブ

写真撮影：広河隆一

サイズ：見開き時 縦51.4cm×横36.4cm

(従来のものより全体が約3cmずつ小さ目です)



販売品のご案内

～収益は子どもたちの支援に～

(子ども基金のホームページ“最新情報欄”にも写真入りで紹介しています。)

ベラルーシとウクライナの雑貨

「しおり：ベラルーシの女の子」

1枚350円。ベラルーシ製ハンドメイド。縦14.8cm×横4cm。台紙は紙製、模様部分は布。ベラルーシの民族衣装を身に着けた女の子がモチーフです。



「マトリョーシカの

マグネット」 1個350円
ウクライナ製ハンドメイド。
およそ縦6cm×横(最大幅)4cm。
飾りとしても、またメモを貼り付けたりするのも便利です。



書籍

『ニーナ先生と子どもたち』広河隆一著・写真(小学館)“日本語版”1,300円

チェルノブイリ事故により放射線汚染地域となった学校のニーナ先生、病気の子どもたち、自然界の異変、人が住めなくなった村など、被災地の様子を、写真を通して伝えています。

『ニーナ先生と子どもたち』“日本語版”+“英語・ロシア語版”(チェルノブイリ子ども基金発行・モノクロ簡易版)セット販売のみ1,600円

雑貨と書籍の送料は実費負担となります。

上記以外にも、ナターシャ・グジーのCD、広河隆一撮影の絵葉書、被災児童の描いた絵の絵葉書なども販売しています。ご希望の方は事務局までお問い合わせください。雑貨の色・柄はお任せください。

ご注文方法：住所 電話番号 氏名
希望品名と数量を明記の上、FAX・TEL・メールでお申し込みください。子ども基金のHPからもお申し込みいただけます。

お支払い方法：振込用紙を同封しますので、品物が届きましたらお振込みください。小額の場合には切手でのお支払いも可能です(封筒に金額分の切手を入れてお送りください)。

黒部ドクターのお話



新型インフルエンザの今後の対策

新型インフルエンザは、予測通り5~7月で一時流行がおさまりましたが、8月には第二波の流行が始まりました。私の予測では、一波より軽症になり、ほぼ例年の季節性のインフルエンザと同様になっていくかわり、流行は大きくなります。なぜなら、第一波では、A型と判ると自宅待機させられ、精密検査されました。それで243時間で結果が出て、その間移動しませんでした。その後例年の季節性インフルエンザの少し変異したものと判り、大げさな対策は解除されました。当初の死亡率は、世界では0.5%と言われましたが、日本では死者はなく幸いでした。新型は一旦治まってから、第二波が出ます。今回の新型は8月から始まる学校や幼稚園があって、もう第二波の流行が始まっています。

しかし、軽症なのでかかっても外出し、動き回ってウイルスをばら撒き、解熱剤を使用した為に子どもの脳症が出たし、肺気腫や慢性の持病を持っている人にまで感染が拡大し、死者が出てしまいました。

新型は、例年より大きく、15~20%くらいの人が感染し、例年の死亡率0か1%や年1万人の死者を上回りそうです。死者の多くは、高齢者、肺や呼吸器に病気のある人や重い慢性病を持っている人、妊婦でも妊娠中毒症のある人で、子どもの脳症は解熱剤を使用した子どもになるでしょう。新型ワクチンは、効果は判らないというのが正確です。例年のワクチンと同じ製法で作られていますが、型がわかっているだけに軽く済む効果はあるかも知れません。それは、インフルエンザウイルスは主に呼吸器に感染し(新型は下痢もするようですが)、血液には入らないのに、血液に免疫をつけようとするワクチンで、初めて使うワクチンだから、100%の効果は期待できません。しかも、市販されるのが10月下旬になるし、十分な量はすぐにはできず、できた頃には終息し、間に合い

ません。すでに沖縄では終息に向い始めています。

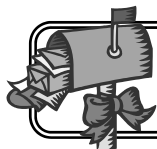
今後各地で流行し9月下旬から10月前半にピークを迎え、各地で流行の始まりから約1か月で終息していくでしょう。ウイルスは二種類同時にはかからないので、新型がおさまってから、季節性の例年のインフルエンザが流行する可能性が残ります。

かかったら休息することが大切

日本人の99%の、大きな持病がなく、健康な人は、2~3日の熱と頭痛で治りますから、不安な人、持病のある人は、抗インフルエンザ薬のタミフルやリレンザを使い、それ以外の人にはワクチンも抗インフルエンザ薬も要りません。解熱剤はインフルエンザに使うと悪くなり、子どもに脳症を起こす危険がありますから、使わないで下さい。解熱剤は市販の総合感冒薬にも入っています。薬は、使うなら合併症予防のための抗生物質と軽い麻薬のリン酸コデインでしょう。リン酸コデインで頭痛や体の痛みがとれ、楽になります。いずれにせよ、感染して発病する人は、最大で20~35%なので、普段から無理せず、健康管理をしておけば、心配することはありません。

かかったら、しっかり休息することが大切で、薬を飲んで、無理して仕事をすることは、ウイルスをバラ撒き、体を傷めることになります。病気にかかることは、休息しなさいという自分の体からの指令です。人には誰でも、自然免疫がありますから、それが働かない時に病気になるのです。体を休め、こころのストレスをなくすことが一番の治療です。肺気腫などの呼吸器病や大きな持病のある人は、家に閉じこもって流行が終わるのを待ちましょう。人混みや人の集団を避けること。周辺で流行が始まっても2週間で大流行は過ぎ、1か月で終息します。できるだけ外へ出ないことが予防の第一です。

黒部信一：吹上共立診療所所長 小児科医師



ミンスク便り



最近、ベラルーシの人々に紹介する目的で、日本の夏を彩る季節の年中行事について文章を書く機会がありました。今回の「ミンスク便り」では、その中でも特に、日本のお盆について調べる中で私が興味をもった、ベラルーシのお盆とも呼べる行事を御紹介したいと思います。

日本のお盆が仏教行事でありながら、元々日本人がもっていた祖先崇拜の習慣をその土台としているように、ベラルーシやロシア、ウクライナなど東スラブ族の伝統も、ギリシャ正教などキリスト教（ベラルーシではカトリック信者の割合が2割程度を占めるとされる）の信仰に基づいたものが中心ですが、キリスト教が伝わる以前の多神教時代からの風習が受け継がれ、さらにキリスト教の儀式と結びついたものが少なくありません。祖先を敬い、その魂を迎えて供養する行事は、そうしたキリスト教以前から受け継がれてきたものの一つで、特にベラルーシでは、キリスト教の要素が加わる前の古い伝統を色濃く残していると言われます。霊がこの世に戻ってくるという考え、また、亡くなった親族を悼むのではなく、別の世界に行ったことを喜ぶという供養の精神には、お盆そのものにぎやかな盆踊りと通じるものがあります。

古来ベラルーシ人は、週の曜日それぞれに役割を与えて生活しており、たとえば何か重要なことを始めるには月曜日を避けて火曜日とし、木曜日には「清潔」を心がける、金曜日は女性のための日、という具合でした。土曜日は祖先を敬う日となっており、毎週墓参りとはいかないまでも、祖先や亡くなった家族を思い出し、その功德を偲ぶといった習慣があったそうです。年間では特に、キリストの復活を祝うイースターの後、9日目に当たるラドニツァ、11月上旬のジャドゥイ（「先祖」の意、一般には「お

じいさん」という意味の言葉）が先祖を供養する日として大きな行事となっています。春のラドニツァには、墓参りをするのが一般的で、ベラルーシでは毎年火曜日に当たるこの日が休日となっています。墓参の便宜を図るため、ミンスクではバスの臨時便も編成されます。春の先祖供養には、その年の農作業が順調であることを祈る意味もあったようです。一方、秋のジャドゥイは、ロシアよりベラルーシやウクライナで重視されている日だそうで、墓参りをし、教会では追善供養のための礼拝が行われる他、夜は家で祖先の霊を迎えるためのご馳走（必ず、品数は5品以上で奇数とする）を用意し、家族そろっての食事の後、夜中に戻ってくる祖先の霊のために食卓を片付けず、そのまましておきました（あるいは、霊が食事を共にできるよう、食器を余分に用意しておいた）。食卓につく順番も、年長者からと定められていました。供養のための特別な料理としては、クチャと呼ばれる生命、再生の象徴である穀物から作る粥があります。食事の最後には、先祖の霊が家族を守るようお願い、元の世界に送り出しました。

調べていると、日本人にとって最も重要な年中行事の一つであるお盆についても、実に知らないことが多いのに改めて気づかされました。また、ベラルーシにも古来から人々の生活の節目となってきた年中行事や風習・伝統があり、その中には日本のものと類似した要素も多く、民族や風土が異なっても、人類には共通する感情があることを感じました。日本でもベラルーシでも、都市化や時代の波に押され、こうした古くからの風習は急速に失われつつあります。ある程度は仕方ないのかもしれませんが、人類が人類である限り、その自然な感性・感情に基づいた伝統行事を見直すことは、決して無駄ではないと思います。

（花田朋子 ミンスク在住）

***** 募金・救援状況 *****

募金状況 2009年6月～8月

	6月	7月	8月
郵便振替	98件	281件	123件
現金	5件	12件	8件
救援寄付金	613,339	822,647	743,109
保養費	54,000	246,035	54,230
特別保養費	385,000	210,000	35,000
里子支援	59,820	1,501,050	619,550
09年特別保養賛同金	91,000	282,000	100,000
合計(円)	1,203,159	3,061,732	1,551,889

☆他に現物寄付(商品券、切手、ハガキ) 9,273円分
 救援状況 2009年6月～8月 (単位:円)

<ウクライナ>

子どもたちの生存

- ・里子支援 8人'09.7～12月分 230,928
- ・緊急支援 1人'09.7～12月分 30,150

<ベラルーシ>

希望 21

- ・特別保養費(子どもたちの保養 1/2) 673,833

困難の中の子どもたちへ希望を

- ・運営費(スタッフ給料'09.7～12月分、車修理ほか) 277,789
- ・特別保養費(バス、保険代) 201,515
- ・里子支援 58人'09.7～12月分 1,666,930
- ・緊急支援 2人'09.7～12月分 57,732

♥ 募金団体名一覧 ♥

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。多くの方々からご寄付をいただきました。みなさまに心より感謝申し上げます。
 (順不同・敬称略)

【6月】リサイクルグループ カリーナ/渋谷ロゴスキー/東用堂治療院/京阪さつきライオンズクラブ

【7月】日本山妙法寺/カトリック徳田教会/一戸南小学校児童会/安西メディカル(株)/常行寺/(有) エスポワール/おはなしのいえ/日本キリスト教協議会/イエスキリスト教会 祈りの家/三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金/チェルノブイリ子ども基金奥羽支部/自治労日野市職員組合

【8月】(株)音楽センター/学校法人千歳栄光学園 千歳第2幼稚園/社会福祉法人至愛協会 かしのみ保育園/ナターシャ・グジーコンサート実行委員会/「今、この時を生きる」会/リサイクルグループ カリーナ/(株)リコー/ナターシャ・グジーのちの輝きコンサート実行委員会/チェルノブイリとイラク・ヒバクをたどる写真展実行委員会/平和を語り継ぐ三世代の会

チェルノブイリのサイン

- ・里子支援 15人'09.7～12月分、'09.7～8月分 375,271

チェルノブイリの歌声～みなさんからのお便りのコーナー

- ・世界中の子どもたちが元気になりますように。(愛知県 Sさん)
 - ・チェルノブイリの人達が身心ともに元気になってくれることを祈っています。(福岡県 Yさん)
 - ・6月に6日間写真展を行いました。写真展のために寄せられた残金です。お役立て下さい。(奈良県 Yさん)
 - ・漢字あわせ 子ども基金が 期待にこたえ 医療機器など 寄贈する
- ※漢字の音が同じ 基=其+土 期=其+月 ※漢字の形の連関 ことば遊び作家 岡田寿彦さん

・写真展が12日、無事閉館しました。来館者199名と、9日間の開催としては、盛況とはいえなかったかもしれませんが、皆さんじっくりと観て下さいました。絵葉書は半分くらい売れました。残りの葉書を使って、来てくださった方に少しずつお礼状を書いていこうと思っています。それとパンフレットですが、20部ほど残っていたのですが、最後の日にいらした方が、お店に置きたいので譲って下さい、と言ってくださって、お渡ししました。喫茶店を宇都宮で開いているそうです。DAYS JAPANをお店に置いていて、タフドアというお店です。宇都宮にいらっしゃることがありましたら、ぜひお顔をだしてみして下さい。タフドアのオーナーさんは、写真展のことは新聞ではなく、お店のお客さんが教えてくれた、とのこと。なんだかうれしくなっていました。写真展を通じて、出会いとか、つながりとか、とても感じられた9日間でした。

<栃木・小山・まちかど美術館より 2009,8,13 栃木県 佐通さん>

事務局から

ボランティア募集

参加される方は日程が変更になる場合もありますので前日までにご連絡ください。事務局への電話は平日午前 10 時～午後 5 時半の間に、留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

ボランティア作業日について

毎月第 1・3 土曜日の 1 時半～5 時半 簡単な事務作業を手伝ってくださるボランティアを募っています。

次号ニュース発送作業

12 月 20 日(日) 1 時～5 時 場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室（通称ぼらせん：飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階） 発送作業を手伝っていただける方を募集しています。少しの時間でも歓迎です。

10.3 NO NUKES FESTA 2009

～放弾能を出さないうエネルギーへ～

10 月 3 日 明治公園(東京・千駄ヶ谷 駅徒歩 5 分)

開会 11:00～ ライブ、トーク、ブース、ワークショップ

15:30 パレード出発

「子ども基金」「写真展事務局」共同で出店します。カレンダー・絵ハガキ・雑貨・書籍などを販売。展示および販売を手伝ってくださる方募集。また、パレード参加者も歓迎です。一緒に歩きましょう。詳しくは基金事務局まで。

チェルノブイリ 23 周年写真展

10 月 2 日 総評会館(お茶の水) 9 時～20 時 まで 1 階ロビー に展示します。

展示、撤去の作業を手伝ってくださる方募集。

10/1(木)18 時～展示、2 日(水)20 時～撤去

3 日のフェスタ・前夜祭として、同会場で「原発現地から」ほか 2 つの分科会があります。

また、3 日の夜と 4 日にも関連イベントが他会場で行われ

ます。詳しくは全国実行委員会へ (T&F 03-3256-1695)。または 10・3 ノーニュークスフェスタの HP をご覧下さい。

/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*

24 周年 救援カレンダー ～いのちの輝き～

同封チラシおよび 14p をご覧ください。2010 年度版は送料込み 1,500 円です。また、チェルノブイリカレンダーをごらんになったことがない方はこの機会にぜひお求めください。毎年購入されている方は 2010 年版もよろしく願います。

今回の同封物

カレンダーチラシ、写真展事務局機関紙、振替用紙、早稲田フォトジャーナリズムチラシ

振替用紙について

振替用紙を事務作業の都合などにより、一律に同封させていただいております。決して募金を強要するものではありません。募金の領収証は郵便局発行の払込受領証で代えさせていただきます。領収証が必要な方はチェックをおつください。

< 編集後記 >

総選挙の夏が終った、まるで雪崩を打ったような圧倒的な民主党の勝利で、弱者にやさしい国づくりがこれから始まるだろうか、ポピュリズムに踊らされない市民一人ひとりの意志が反映される社会に近づけるだろうか?ともあれ We've only just begun.... (み)

稲城市で行われた「平和を語り継ぐ三世代会」のイベントに参加。広島の被爆者・祖母のことを本*にした母。文字通り三世代の娘さんを中心に大学生たちの朗読は感動だった。語り継ぐという大事なことを改めて教えられた気がする。(む)

*『ピンク色の雲』宇留賀佳代子・文 稲田善樹・絵

発行人 チェルノブイリ子ども基金 鈴木総 発行日 2009 年 9 月 12 日 (年 4 回発行)

〒162-0816 東京都新宿区白銀町 25 メゾンド原 207 号室 Tel / Fax 03-5228-2680

郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

ウェブサイト = <http://www.smn.co.jp/cherno/index.html> e-mail: chern01986@tokyo.email.ne.jp

事務局ブログ更新中 神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

当基金は任意団体のため税金控除の対象になりません。ご了承ください。